

## 歴史と文化

## 日本佛教の源流をたずねて

田村 圓澄\*

## 1. 朝鮮半島と私

私が古代朝鮮半島の佛教に関心を持ち始めましたのは新しいことで、大学紛争がピークだった昭和44年頃、その頃から私は、俄に古代の朝鮮佛教に関心を持つようになったのです。それ以前は恥かしいことですが、全く関心がなかったのです。日本の佛教史には関心がありました。

日本の佛教がどこから来たかということは、小学校の頃、百済から伝えられたと教えられました。しかし百済が一体どこにあるかということについては、今から15年前までは関心がなかった。地図を広げてみて百済がどこかと探す気にはならなかったし、大体佛教が日本に伝來したところから研究を始めたのです。

日本の佛教史の研究書は、明治以来随分沢山出ていますが、日本佛教史概説を見ますと、すべて欽明天皇の佛教伝来から始めておりまして、それ以前のことにつぶれた本は一冊もありません。私も明治以来の日本佛教史の学風をそのまま鵜呑みにいたしまして、佛教伝来から研究を始めました。佛教伝来の前については、今申しましたように関心がなかったのです。

何故また関心が起きたかということになると、理由らしいものはありません。ふとそれに気が付き、居ても立ってもいられなくなりまして、生ま

れて初めて韓国に参りました。昭和46年の4月でした。それからはよく行くことになりますが、このときまでは行ったことはなく、韓国には誰一人として知人はいなかったのです。福岡から飛行機に乗りりますと、釜山までは30分間足らずです。私は飛行機で行きまして、初めてこんなに近い所だということを実感致しました。こんなに近いことを、何故今まで気付かなかつたのであろうか、ということを考えた次第です。

私がこれまで韓国、あるいは朝鮮半島のことについて関心がなかったのは、学問研究の態度につきまして自分自身が不心得であったということの外に、近い韓国はいうまでもなく、北朝鮮を含む朝鮮半島のことについて、あまりにも知らなかつた、いや知らなさすぎたからであると思います。その時以来、今日まで約20回程韓国に行っております。そして韓国では、諸先生から色々話を

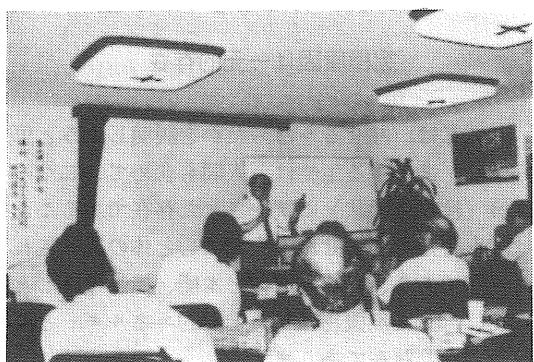


写真-1 第4回講聴会

\*九州歴史資料館長

聞かせて頂いたり、各地を見学したりして、段々わかってきたことです。

私自身の反省と致しまして、これまで日本は朝鮮半島の方々に対しては常に加害者の立場にあった。向うの方々は被害者です。これは歴史をたどれば神功皇后の説話は別としまして、文禄・慶長の役とか、あるいは明治以降色々ありました。そういうことの基本的なことに対しまして、私はあまりにも無関心でありすぎたということがあります。

子供の時から、朝鮮半島の方々は日本人より一段低いものだという感じ、つまり一種の差別感をもっていました。私は奈良県の田舎に生まれたのですが、その田舎町においてすらそれが当り前であるような雰囲気がありました。

私は、かつてイギリスに半年間おりましたが、異國の人には下宿をさせないイギリスの家のあることを聞かされました。イギリスに移る前の半年間、アメリカに居りました。ここではそのようなことはなかったのです。イギリスでは事情が違う。これはすべてのイギリス人がそうであるとは思いませんが、つまり人種的な差別について考えたことがなかった私は、外国で多少その辺のことを知りました。

人間として、こういった差別は何としても反省しなければならないと考えます。このことに気が付いたのが今から15年程前のことです。このような反省の中で、今度は自分自身の専門であるところの仏教史、日本仏教の源流を研究することになるわけです。

## 2. 飛鳥時代ということ

当時の仏教は、現在の日本の仏教とは大変違っています。どこが違うかというと、当時の仏教では、寺というのは出家者のためのものであったという前提があります。一般の方々、つまり在の方々のことは、あまり考慮していないのです。

私どもが、たとえば東大寺の大仏殿に入りますと、在家者の坐るような設備はありません。元来、大仏殿の中には僧侶も入らなかったのです。仏事法会はどこでしたかというと、大仏殿の外でやった。回廊などでも法事をしたわけです。法隆寺もそうでした。一般的の俗人の方々は法隆寺の金堂の

中には入らなかった。門の外まで行って礼拝をしたのです。僧侶でも回廊からお勤めをするのですから、法隆寺とか唐招提寺、東大寺などの飛鳥・奈良時代の寺々は、在家者の存在についてはほとんど考慮していないのです。つまり、奈良時代、あるいは飛鳥時代の仏教は、伽藍の建前からすれば出家者本位である。出家者が学問をし、修行する所が寺であります。

現在私どもが韓国に参りますと、お寺は大体、山の中にあります。お寺に参りましても本堂に当る大殿には、畳は敷かれていません。おおむね板敷です。お寺では説教はしない。では何をするのか。坊さんがそこでお経を読む。あるいは法事をする。ないしは学問をする。ようするに現在の韓國のお寺は出家者本位です。中国のお寺もそうです。日本のお寺では、在家者のことが配慮されています。御葬式や仏事も行なわれております。在家の方々のための畳が敷かれてあります。お寺の中に畳を敷くようになるのは中世になって、法然上人が出てきてから後のことです。それ以前の寺のおいては、在家者は主役ではなかったのです。

私がこれからお話しをしようと思っております飛鳥時代の仏教、あるいは、百済とか新羅の仏教は、在家者は主役ではなかったということを考えて頂きたいと思います。仏教にとって在家者は何であったかということは難しいテーマですが、寺というのは、僧侶がそこで修行する所、あるいはそこで学問をする所でした。それが寺である。当時の仏教はそういうものでした。

日本と古代朝鮮仏教について申しますと、古代日本と朝鮮半島の間にどういう交流があったかとか、どういう影響を日本は受けたかということになりますが、私は交流という言葉はあまり使いたくないです。何故なら交流という言葉は、二つの国が同じレベルにある場合には用いることができると思いますが、なにしろ当時の日本には仏教はなかったのです。私がこれから問題にしようと思っている時代の日本には、仏教はなかったのです。朝鮮半島の諸国には仏教はありました。ですから交流と言いたいのですが、双方には落差があるわけです。落差がありますから、古代朝鮮の百済・新羅あるいは高句麗の国々と、日本との間に交流があったという表現は、正確でないように思います。影響と言いたいのですが、影響も日本に

ある程度の影響を受けるような素地があればよいのですが、影響を受けるようなものをこれから作ろうとしている時代ですから、これも言えない。言うなれば伝来です。

伝来というのは、一方ではなく一方にはあるのです。ある方から方に来たのが伝来です。私は古代の日本の仏教のことを考える場合には、伝来というのが一番いいと思うのです。私は伝来という考え方にして、これからお話をさせて頂こうと思うのですが、伝来というのは、1回限りということではありません。1回だけではなくて、向うの人が日本に来、日本から向うに学びに行き学んで帰って来れば勿論伝来ですから、仏教の伝来は1回限りということではありません。

次に時代区分ですが、奈良時代の前は飛鳥時代と呼んでいます。飛鳥時代と奈良時代の間に、白鳳時代を入れることもあります。飛鳥時代の「あすか」は、とぶ(飛)とり(鳥)と書きます。

現在、奈良県高市郡の「あすか」は、あした(明日)のかおり(香)と書きます。『万葉集』に「明日香」と書かれているのに基づいていますが、『日本書紀』は飛ぶ鳥と書いています。これらは当て字であることは明確です。つまり「あすか」という言葉があって、飛ぶ鳥と書いたり、あるいは明日香と書いたりしていますが、「あすか」の意味は、地名辞典をお引きになるとわかりますが、まちまちです。沼地を「あすか」というとあったり、アイヌ語から来たとする説などがありますが、飛鳥という場所が、河内国にありました。『日本書紀』に、「安宿戸郡(あすかべのこうり)」というのが出てまいります。「あすかべ」という場所は大阪府柏原市にあたります。安宿戸の「あ」は安らかということです。安宿戸と書いて「あすかべ」と読ましております。これは『日本書紀』に出てまいります。

「あすか」の地名は安宿から来たという説がありますが、この説があたっているような気がするのです。「宿」というのは長くそこに留まるということです。1泊や2泊ではなく、長く住むことです。安宿というのは、ここに百濟の人達が集団で住んでいたのです。「安宿」という名は、百濟の人達がこの字をつけたのではないかと思われます。この、安宿(あんしゅく)から飛鳥(あすか)になったのであろうと言われております。河内の

旧安宿郡にも「飛鳥」という地名があるのです。飛ぶ鳥と書いて「あすか」と読ませております。「飛鳥」の隣りが「春日」です。安宿というのは、朝鮮半島の百濟から来た人びとがいろんな事情で自分の郷里を捨てて移って来て、この地こそ我々の安らかに居住する所である、という思いをこめて「安宿」の字をつけたのであろう。したがって「安宿」から「飛鳥」になったのであろうという説が、私は妥当な気がするのです。とすれば、奈良県の飛鳥は第2の飛鳥です。河内の飛鳥が第1です。奈良県の飛鳥は、蘇我氏がここに移り住むようになってから、開けてきたように思います。

今申しましたように、河内の飛鳥の人びとは百濟から来たとすれば、飛鳥の故郷は朝鮮半島の百濟であったということになります。このことは、一般に言われているところですが、第2の飛鳥の時代が飛鳥時代です。

### 3. 仏教の伝来

「飛鳥時代」というと、仏教文化の花開いた時代です。その仏教はインドの釈迦によって説かれました。紀元前5世紀のことです。

インドの仏教は2つのルートに分かれて伝えられました。ビルマ・タイ・ベトナムに伝えられた南方仏教と、シルクロードを通りまして、中国本土、朝鮮半島、日本に伝えられた仏教です。南方仏教は、小乗仏教であります。小乗という言葉を使わない傾向になっておりますので、上座仏教とも言います。北の方にまいりました仏教は大乗仏教です。

どこが違うかと申しますと、南方仏教の本尊はお釈迦様だけです。お寺に参りましても本尊は釈迦像であり、他の仏や菩薩像はありません。菩薩には観音菩薩とか地蔵菩薩などがあり、仏には大日如来とか薬師如来とか阿彌陀如来などがあります。小乗には釈迦のみあって、釈迦以外の仏や菩薩はないのです。小乗仏教といわれる南方仏教は、釈迦像とそして釈迦の舍利が中心です。舍利は塔に納められています。スリランカやタイの寺に行きますと、美しく大きい見事なパゴダ(塔)があります。

さて、大乗仏教がシルクロードを通じて中国本土に来たのは、紀元前後の頃だと言われております。

す。正確に何年ということはわかりませんが。紀元前後の漢の時代です。それから朝鮮半島の高句麗に来るのが4世紀、百濟に来るのが5世紀、新羅と日本が6世紀です。シルクロードの仏教には1つの特徴があると思います。

先程、出家者たちのことを申しましたが、出家者というのは世間を捨てるわけですから、自分の家族や家を捨てて修行するのです。これが出家者です。釈迦がそうであったように、仏教は出家者を対象としています。したがって仏教の伝来は、たとえば深山の奥に来るとか、あるいは絶海の孤島に来るといったような、人里離れたところに仏教が伝わってくるというように考えてもよいのです。

シルクロードを伝わってきた仏教は、そうではありません。仏教は1つの方向を目指して来ているのです。どの方向かと申しますと、たとえば中国本土でいうならば都です。長安であり、洛陽です。それから、大同の石仏は北魏ですが、その大同（平城）に都がありました。それから朝鮮半島で申しますと、高句麗の場合は丸都です。好太王の碑文のある輯安に丸都という都がありました。高句麗は後には今のピョンヤン、平壤に都を遷します。百濟では公州・扶余が都でした。新羅では慶州です。日本では飛鳥であり、奈良、それから京都です。常に政権を目指して仏教が伝来して来るというのが事実です。これは否定できません。仏教は出世間の教えですから、政権を捨てて山の中に行けばよさそうですが、さにあらず、仏教は常に政権の所在地を目指して伝わって来るということです。このことは、当時の仏教の成り立ちを考える上で大事なことであると思います。

仏教伝来というと、何が伝來したのかという問題が出てくると思います。山の中ではなく、また絶海の孤島でもなく、政権の所在地、すなわち都を目指して来た仏教は何かというと、私はこのように考えております。まず、仏教を説いた釈迦や菩薩の像です。諸仏・諸菩薩の仏像です。それから、説かれた教え、すなわち經典です。それを在家人達に説くところの僧侶、つまり仏と法と僧の三宝が来たのです。仏像と經典と僧侶がなくてはならない。

次に仏像と經典と僧侶を納める建物が必要です。伽藍を建てなければならない。そこで建築や彫刻の工人・技術者が必要です。当時の寺、寺院

は今の言葉で言うバンドを持っておりました。伎楽は舞踊と音楽です。音楽や舞踊の公演は法事のアトラクションでした。つまり絵画とか彫刻とか建築とか、それから舞踊などを含めた、工人・技術者集団、また芸能者集団が来るというのが仏教の伝来ということです。

仏教の伝来というと仏像だけ来たとか、僧侶だけが来たというのではありません。仏教という名の文化集団、あるいは総合文化が伝來したことが仏教伝来の意味です。私が言おうとしているのは、絵画とか彫刻とか建築などの工人・技術者・芸能者集団を含めた伽藍仏教がシルクロードを通ってやって来たということです。

伽藍仏教を成り立てるには、国王・皇帝とか、あるいは貴族などの庇護が必要です。平城京の大安寺には900人近い僧侶がいたのです。当時100人を越すような集団をかかえた所は、まずありません。8世紀になって律令制度が整いますと、国々に国司を中心として役人が配置されます。

大きな国でも、中央から任命される役人の数は9名です。現在の都、道、府、県庁に当たる役所において、役人の数は10人にも満たないのです。下級の職員を含めると可なりの数になるのですが、しかし500人、800人の人数を集めていたのは寺しかないのです。しかも寺は、今申しましたように、言ってみれば芸術の殿堂でした。当時の人達からすれば、卓越した芸術、文化の凝集したところであるという理解があったと思います。

伽藍仏教が成立するには、上層貴族の帰依が必要です。私が言おうとしているところの飛鳥仏教は、そういうような形で日本に伝来して来たわけです。

仏教の伝来と申しますと、水が高い所から低い所に流れるように、自然に仏教が一つの国から他の国に伝わってきたようにお思いになる方があると思います。私もかってそのように考えていましたが、いま考えますと、事実はそうでないよう思います。何らかのきっかけがないことには、仏教は伝わって来ないというのが私の考え方です。

たとえば魏志倭人伝には、3世紀の倭のことが記されています。邪馬台国の女王卑弥呼は、生きている間に2度、魏の都の洛陽に使者を派遣しております。仏教が中国本土に伝來したのは1世紀頃と申しました。3世紀の洛陽では、仏教は盛ん

だったのです。有名な白馬寺という寺をはじめ、寺々が建ち、僧が集まっていました。

法然上人の浄土宗、あるいは親鸞上人の浄土真宗では、大事なお経として3つあります。その中に『無量寿經』というのがあります。この經典は3世紀の魏の都の洛陽で翻訳されました。翻訳というのはサンスクリット、すなわち梵文の經典から訳されたのです。卑弥呼の使者が行ったとき、魏の都の洛陽では、このお経が翻訳されていました。卑弥呼の使者は魏の都に行き、寺を見たにちがいありません。お経を読む僧侶にも会ったでしょう。これは何かと、魏の人に質問をしたでしょう。邪馬台国に帰って報告したと思うのです。しかし、誰も3世紀の邪馬台国に仏教が伝わったとは言わないでしょう。私は逆に伝わらなかったのかが不思議です。中国に仏教が来たのは1世紀です。しかも都に来たというのでしょうか。卑弥呼の使者は魏の都に行ってるので、どうして邪馬台国に仏教が伝わらなかっただのしょうか。私はこれが不思議です。

5世紀の中国は南北朝時代になります。宋は南朝です。今の南京は建康と呼ばれ、都がありました。当時の日本は倭と呼ばれておりましたが、倭の5人の王が次々に宋の皇帝の許に使者を派遣しました。五王を誰に当てるかということで諸説がありますが、最後の武が雄略天皇であることについては意見が一致しています。5世紀の中国では、仏教は盛んでした。特に南朝は仏教が盛んでした。

先程申しました浄土宗あるいは浄土真宗では、大事なお経の中に『觀無量壽經』があります。『無量壽經』には阿彌陀如来の本願の救済が説かれていますが、『觀無量壽經』の方は極楽淨土の光景を観る方法が説かれています。いかにして極楽淨土を見る能够かということで、「觀」というのは心の中で見ることです。それによって極楽淨土の救いに預かる能够と説かれています。この『觀無量壽經』は、宋の都の建康で訳されました。5人の倭の王が使者を派遣した頃に翻訳されました。建康には寺が沢山ありました。しかし5世紀の日本に、宋から仏教が伝來したということは誰も言いません。事実は、仏教は倭に伝わらなかっただのですが、しかし何故仏教が伝わらなかっただのかが不思議です。

仏教の伝來には何らかの意図があったと思いま

す。つまり仏教を持っている国は、そう簡単に隣国には仏教を伝えない。しかし何らかの理由、動機があれば、仏教を伝えるのだという観点に立てば不思議ではない。今でもそうでしょう。産業の大変な機密は、自然に隣国から隣国に流れ出ることはありません。軍事的なものもその通りです。

当時の仏教もその通りなのです。仏教は人々を救うものであるとしても、簡単に伝来しない。先程申しましたように、仏教は当時の都を目指して伝来してきました。つまり王権が仏教を掌握していました。そしてある理由に基づいて、隣国にそれを渡すといったような事があったとしか思えないのです。それは高句麗の場合によくわかるのですが、これを説明している時間がありません。とにかく当時の仏教は王権の一部であり、何らかの理由がないことには、仏教は他の国に伝えられなかっただのようになります。

さて日本に仏教が伝來しました時期について、2つの説があります。第1は538年であり、第2は552年、つまり欽明13年です。欽明13年は『日本書紀』に書かれた仏教伝來の年です。538年は、法隆寺など奈良の寺々に伝わっていた仏教伝來の年です。私は538年が仏教伝來の年であると思っています。538年に百濟から仏教が伝來しました。

#### 4. 百濟の仏教・新羅の仏教

百濟は何処から仏教を伝えられたかというと、北の方の高句麗ではないのです。南朝から仏教を伝えられました。百濟と高句麗とは仲が悪かったのです。北の高句麗から仏教が伝えられたのではなくて、南朝から仏教が伝えられたのです。百濟は南朝と友好関係にありました。

百濟の仏教のことで申さなければならないことがあります。百濟は仏教国であった。しかし同じ仏教国であった新羅とは違う所があるのです。どこが違うかというと、現在の韓国では考古学の発掘調査が進んでいます。韓国全土を発掘したわけではないのですが、現時点では百濟時代の寺があつた所は大体わかっているのです。何処に寺があつたかというと都なのです。百濟は3回都が変りました。初めは漢城にあったのです。高句麗に攻略されましたので、公州に都を移しました。ここも政治・軍事的に不利であるということになりました。

て、錦江の下流の扶余に遷りました。百済は扶余時代に滅びます。第2番目の公州、第3番目の扶余のほかに、陪都と申しまして、益山という所に副都を造ったのです。百済時代の寺があった地域は、公州と扶余と益山の3つに限られております。都以外の地方には寺はありません。

百済は仏教国だから、全土に寺が広がっていたように思われがちです。私もそう思っていたのです。しかし韓国に行き、向こうの方々とお話ししている間にわかったことは、百済は都にしか寺がない。都に寺が集中しているということでした。逆に言うならば、百済では、仏教は国王とか中央貴族が受容者であり、一般民衆にまでは広がらなかつたということです。百済は660年に滅んでいますから、百済が滅びるまでには一般の民衆にまで仏教は浸透しなかつたと言わねばなりません。

新羅の場合はどうかというと、新羅は10世紀初めまで続くのですが、その間、慶州が都でした。慶州には約90程の寺がありましたが、地方にも新羅時代の寺があります。つまり新羅では一般民衆にまで仏教が広がったことがわかります。おおざっぱに言うと、百済と新羅とではこのように違うのです。百済では仏教の受容者は限られております。新羅では仏教は地方にまで広がっていた。仏教が貴族階層の独占の情態であった国と、一般民衆にまで広がっていた国とでは、その国力に大きな差がでているのです。百済が新羅によって滅ぼされたのは、仏教が広がらなかつたからであるというわけではありません。しかし新羅では民衆レベルにまで仏教が広がっていたということは、新羅では仏教が国力の増大に貢献したと考えられます。

仏教の伝来につきまして、九州は朝鮮半島に最も近い。そうすると大和の飛鳥に仏教が伝えられる前に、九州北部に仏教が伝來したのではないかという意見が出てきます。これについて私は2つの点を考えます。第1は先程も申しました「伽藍仏教」という視点です。工人・技術者集団や芸能者集団を含めた伽藍仏教は、6世紀には九州には来なかつたのです。仮に仏像一つをとりあげましょう。九州の人が海を渡って百済に行き、百済の知人から仏像を貰い受け、九州にまで持ち帰つて来て、家の奥に安置して拝んでいたとするならば、これも仏教伝来です。私はこれは「私宅仏教」

と名付けています。自分の家の中で、仏像であれ何であれ、これを信仰するとすれば、これは「私宅仏教」です。私宅仏教は九州にも存在していた可能性があります。しかし大事なことがあります。

「伽藍仏教」から「私宅仏教」に移行することは可能ですが。しかし「私宅仏教」から「伽藍仏教」に移行することはあり得ません。「私宅仏教」をいくら積み重ねても「伽藍仏教」にはなりません。伽藍仏教は国家権力と関係があります。この点をはっきりさせた上で、九州に仏教が伝來したと主張するのであればよろしいと思いますが、九州仏教伝来说は基本点の整理が不充分です。大和の飛鳥の方には538年、つまり6世紀の前半に仏教が伝來しました。九州に伽藍仏教が伝來するのは7世紀の後半です。しかも大和の飛鳥から来たのです。

第2は、もし九州に仏教が伝來したとするならば、百済の各地方にまで仏教が広がっていたということを前提としなければなりません。百済の地方には仏教が広まっていないとすれば、北九州の人が、百済の田舎で仏像を貰い受けるということは不可能であったでしょう。都に行き、中央貴族に会って仏像を貰うのであれば、話はわかりますが、とにかく百済の地方には仏教はなかつたのです。ですから、そう簡単に九州に、仏教が伝來したとするわけにはいかないというのが私の考えです。

次に、新羅では全土に仏教が広がっていました。寺院址の発掘調査などによって言えるのです。この点が百済の寺院と新羅の寺院との違いです。日本の場合を申しますと、飛鳥時代には40近い寺があったのです。奈良県で過半数を占めています。大和に都があつたからです。次が大阪府です。京都府のほかには滋賀県と兵庫県に1寺か2寺ある程度です。都があつた大和を中心といたしまして、摂津と河内、それから山城に過半数の寺が集中していました。ところが1世紀も経たない藤原京の時代、すなわち持統・文武・元明の頃になりますと、寺の数は500を越すのです。1世紀も経たないうちに寺の数が14倍になります。関東地方から四国・中国・九州の全国に広がります。急速に寺が建っていくのです。仏教伝來の当初にはごたごたがありましたが、1世紀半の間に仏教は日本全土に広まりました。日本の場合は百済式ではな

く、新羅式というべきでしょうか。何故、爆発的に仏教が日本全土に広がったかということは、私どもにとりまして重要な問題です。

日本に仏教を伝えたのは百済でした。その仏教は中国から百済に来たわけです。中国、朝鮮、および日本の三国を考えた場合、象徴的なことがあります。それぞれが伽藍仏教であることに変りはないのですが、たとえば韓国にまいりますと、いたる所で石塔に出会います。

石塔とは石で作られた塔です。三重塔、あるいは五重塔などがあり、10 m から 15 m 位の塔もあります。田園の中に塔を見かけることもありますが、かつてここに伽藍がありました。斑鳩の法隆寺のように、伽藍の中央部に石塔があったのです。塔の前には中門があり、塔の後方には金堂・講堂がありました。金堂は仏事法会をする所です。講堂は学問する所です。中門、塔、金堂、講堂が南北の一直線上に並んでいました。四天王寺式の伽藍配置です。塔が西と東に別れる双塔式伽藍配置は、奈良県の当麻寺などがそうなのですが、そのような伽藍配置の寺もあります。塔以外の建物はすべて木造でした。塔だけが石で作られていたのです。石塔だけが残っておりますから、どうして田園の中に石塔を建てたのであろうかと考えられます、今は田園の中ですが、もとはそうではなかった。回廊に囲まれて、南大門、中門、塔、金堂、講堂という伽藍配置であったわけです。

日本では石塔はほとんどありません。全部といつていい程木塔です。法隆寺の五重塔も木塔です。韓国では、塔といえば石塔が大部分です。

中国に行かれた方は御承知のように、中国の寺院の多くは塔で造られています。塔と言うのはレンガです。レンガを積み重ねて造ってあります。17年間のインド留学を終え、再びシルクロードを通って 645 年に玄奘三蔵は長安に帰って来ました。玄奘がいた大慈恩寺の塔は 60 m を越す大きな塔です。この塔は西安のシンボルになっています。

中国の塔といえば塔です。韓国の塔は石塔です。千を越す石塔が残っております。日本の塔は木塔です。塔は釈迦の舍利を奉安する所であり、伽藍の中でも最も大事な建物です。この塔が国によりまして、また民族性や風土によりまして、塔、石塔、木塔と 3 つに区分されている。これは

興味深いことです。どうして中国では塔、韓国では石塔、日本では木塔になったのであろうかと考えさせられます。これについて専門の方々が色々説を出しておられます、日本人は石塔を造ることをしなかったのです。伽藍の中でも釈迦の舍利を安置した最も大切な建物である故に、たとえ木造建造物は焼けても、塔だけは残したいということで、朝鮮半島では石塔を造ったのではないかと思うのです。

## 5. 日本の仏教伝来

日本の仏教伝来ですが、欽明天皇の時に仏教が百済から伝えされました。その年次は法隆寺や法興寺すなわち飛鳥寺に伝えられた 538 年です。

538 年に仏教が日本に伝えられたとしますと、当時の百済にとりまして 538 年は大変な年だったのです。何故なら都が公州から扶余に移された年だったからです。百済にとりまして国家的な危機の時代だったのです。仏教を日本に伝えました聖明王は、その 15 年後に新羅との戦いで戦死するのです。百済が国家的にも危急存亡の時に、日本に仏教が伝えられたのです。

『日本書紀』を見ますと、百済から伝えられたのは仏教だけではありません。その前後に、医博士、すなわちお医者さんとか、易博士、曆博士、お薬の先生の採薬師、樂人といった文化的な指導者があい前後して、欽明天皇の所に送られてきます。どういうことかというと、私はこう考えます。

北の高句麗、あるいは東の新羅の百済に対する軍事攻勢に対しまして、大和朝廷は百済に軍事援助を続けていました。その基地となったのは、今の福岡にあった那の津でした。そこに官家がありました。ここを基地として、大和朝廷は百済に食糧、武器、兵士などを送っております。百済からは、筑紫の兵士が強いから、筑紫の兵士を頼むという依頼もありました。百済の使者が筑紫に来て、百済に送られる援助の品を実検しております。そういった大和朝廷の軍事援助に対するいわば謝礼でもあり、同時に今後とも宜敷く頼みますという懇願の意志表示として、日本にないところの文化を贈ってきました。その中に仏教があったと思います。

百済にとって、仏教はとっておきの贈物であつ

たのです。つまり切り札でした。ようするに仏教が伝来するだけの理由はありました。その理由というのは、百濟は危急存亡の時期を迎えていたし、頼りになるのは日本だけです。北の高句麗は敵ですし、東隣りの新羅も敵です。頼ることができるのは日本だけであり、大和朝廷だけでした。だから大和朝廷に対して、今までの援助に対する謝意を表わすと同時に、今後とも宜敷くという懇意の表われとして仏教を送ってきた。つまり仏教は贈物であったと考えています。

16世紀に日本にキリスト教が伝来致します。フランススコ・ザビエルという宣教師が鹿児島に上陸する。ザビエルは神の福音を説くために日本に来たのです。日本語を勉強して日本に来た。鹿児島に着くなり、神の福音を説いている。

欽明天皇の時に仏教が伝来しました。何が来たかというと、仏像と經典です。僧侶は来なかつたのです。『日本書紀』にも、僧が来たとは書いてないのです。百濟から送られて来た仏像と經典の名稱について、『日本書紀』と法隆寺など奈良の古い寺の伝承とは違います。奈良の寺々の伝承は興味があります。何が送られて来たかというと、仏像は太子像でした。悉達太子像つまり釈迦が出家、入山する前の太子像でした。經典は説仏起書巻と書かれていますから、お釈迦様の一代記です。太子像とは悉達太子が、生・老・病・死の人生の問題に苦悶している姿であります。腰をかけて、片足を片膝の上に乗せ、頬ずえについて、考え込んでいるという半跏思惟像です。これが太子像です。それから説仏起書というのは、釈迦の一代記です。

百濟の方では、日本に仏教を送る場合に、異国の人相をし、厳しい顔付の釈迦像よりも、やさしい表情の、もの思いにふけっている斑鳩の中宮寺や京都太秦の広隆寺の半跏像が有名ですが、この半跏像の方が親しみやすいと考え、釈迦の伝記と共に送ってきたと私は考えております。しかし僧侶は来なかつたのです。仏教伝来は、言ってみれば贈物です。何故僧侶が送られてこなかつたかというと、百濟ではすぐに仏教を広めるというような気はなかつたのではないかと思います。なかつたと言い切ると語弊があります。まず手始めに仏像と經典を送って来たというべきでしょう。フランススコ・ザビエルのように、僧侶が積極的に日

本に乗り込んで来て、ここで仏教を説いたというのではありません。

538年に百濟から仏教が贈られてきました。このとき蘇我氏や物部氏などの中央豪族が初めて仏教に接したかというと、私はそう思わないのです。当時の日本人は、3世紀の邪馬台国を例に取らなくとも、朝鮮半島との間を往来しています。何度も申しましたように、百濟に対して大和朝廷は軍事援助を繰り返していました。中央豪族の物部氏にしても、蘇我氏にしても、紀氏とか巨勢氏とか色々な豪族がありますが、百濟に行き、そこに留まっています。『日本書紀』を見ますと、日系韓人の活躍が記されています。韓国の女性の「韓婦」と、日本の豪族との間にできた子供のことが出てまいります。物部氏は保守的であり、日本から一歩も海外に出なかったとか言われています。そうでしょうか。物部氏の「物」というのは武器のことです。「部」は集団を意味します。物部氏は天皇家の軍事を担当する豪族ですから、百濟への軍事援助では中心的な役割を果たしたのです。同じ軍事的豪族である大伴氏と共に、朝鮮半島に行っているのです。朝鮮半島の情況、特に仏教については、ある程度知っていたに違いありません。したがって仏教を取り入れるべきか、取り入れるべきでないかということを、あらかじめ決めていたに違いありません。

欽明天皇の仏教伝来の時に、中央豪族は初めて仏教に接し、つまり目の前に仏教を突き付けられたということはあり得ないと思います。日本と百濟・新羅を含めて、朝鮮半島との間は、緊密だったのです。中央豪族は朝鮮半島の情報網をもっていました。そういう中で仏教が伝わったということをお考え頂きたいと思います。

## 6. 仏教と欽明天皇

仏教の伝来に際して大事なのは天皇家の態度です。仏教は欽明天皇の宮廷に贈られてきました。仏教は贈物でしたから、欽明天皇に仏教を説くということはありませんでした。豪族達に仏教を教えることもありませんでした。

百濟の聖王がこれまでの天皇の好意すなわち軍事援助に対して、その返礼として贈って来たのですから、仏教の伝来は欽明天皇と百濟の国王と

の間のことでした。大事なのは欽明天皇の対応です。どうしたかというと、欽明天皇は仏教に対しては傍観中立の立場をとったのです。しかし傍観中立だからと言って、仏像、經典を倉庫に入れておくわけにはいかない。蘇我氏にこれを与えました。

蘇我氏は仏教伝来以前から、仏教について知っていたに違いありません。と言うより蘇我氏が百濟から仏教を大和朝廷に贈るという一幕を仕組んだのではないか。つまり仕掛け人ではないかと思っております。だから蘇我氏は初めから仏教を取り入れるつもりだったに違いありません。これに対して、物部氏は初めから仏教に反対でした。何故物部氏が仏教に反対したかというと、これは当時の政治機構に関連しているものと思います。

当時はまだ天皇という称号はなかったのです。天皇という称号は7世紀の後半に出てくるのですが、当時は「大王」と呼ばれていました。大王の下の豪族は姓（カバネ）によって格付けされました。姓には、臣（おみ）、連（むらじ）、君（きみ）、首（おびと）、直（あたえ）、史（ふひと）など数十種類があり、各豪族の尊卑を表わしていました。豪族の身分のランクですが、姓の中で上位にあるのは臣と連です。

蘇我氏は蘇我の臣です。物部氏は物部の連です。臣姓と連姓の豪族のなかで、とくに有勢のものが、大臣（おおおみ）、大連（おおむらじ）になり、大王の下で政治に参与しました。ところで臣姓の豪族は、先祖が天皇家から出た豪族です。たとえば蘇我氏は孝元天皇から出たといいます。連の方は初めから天皇家に対して隸属していました。天皇家に対して臣姓の豪族は相対的、つまり対等です。

たとえば、江戸時代の大名に親藩がありました。紀伊とか水戸・尾張藩ですが、いずれも徳川家の一族です。臣姓の豪族はこれに近いと思います。それに対して、三河以来の徳川家の家臣団は、旗本、御家人ですが、これは連姓の豪族に近いと考えられます。

連姓の豪族は、日本神話の、いわゆる高天原時代から、天皇家の祖先神とされる天照大神に服属していました。中臣氏は連です。中臣氏の祖先は天児屋命であり、天照大神に仕えていました。天皇家に対する隸属関係は高天原時代にまで遡るわ

けです。物部氏や、大伴氏も連姓の豪族です。蘇我氏や葛城氏は臣姓豪族であり、天皇家に后妃を入れることができました。当時は結婚の場合でも身分・家柄が重要視されたからです。天皇家に対して隸属関係を持つ連姓の豪族は、天皇に后妃を入れることはできなかったのです。大臣の蘇我氏は自分の娘を天皇の后妃に入れることができました。そこで仏教について言うならば、臣姓の豪族は天皇家に対して相対的な立場をとれるわけです。しかし連姓の豪族は初めから上下関係にあったのですから、天皇家に対しては相対的な立場を取ることはできません。つまり天皇家に服従するしかありません。そこで天皇がもし仏教を拒否するのであれば、連姓豪族はそれに従わざるを得なかつたと思います。

古代の大和朝廷では大王の下で、大臣と大連とがバランスをとりまして、政治に参与していました。当時の大臣が蘇我稻目であり、それから蘇我馬子です。大連は物部尾輿、それから守屋とつなぎます。仏教が伝來した時、大臣であった蘇我稻目が仏教伝来の仕掛け人であったように思います。稻目は初めから仏教を受け容れようと考えていたに違いありません。物部守屋は天皇家に対して、右にならえをせざるを得なかつた。天皇家が仏教を受け容れるのであれば、受け容れる筈です。しかし欽明天皇は受け容れなかつたのです。仏像などを百濟の聖王に返すということはあり得なかつた。贈物ですから、貰っておきながら、天皇は仏教を受け容れなかつた。その理由として、古代の天皇は司祭者であったからであると思います。つまり神を祭るということが、天皇家の基本的な性格であったと考えるのであります。

古代の天皇は、当時の豪族のように、土地と人民の支配者にとどまっていたのではないと思います。多くの土地と人民を所有しているのが大豪族であり、少ないのが小豪族です。天皇はそういう意味で豪族とは同じ性格ではなかつたように思われます。何故かと言いますと、豪族にはそれぞれ本貫があるのです。本貫というのは本籍地です。豪族達は蘇我氏も物部氏も、先祖代々の本貫を離れなかつたのです。

仏教が伝來した後に、豪族は本貫に氏寺を建てます。氏寺が建つ前には、各豪族の本貫には先祖代々の古墳がありました。古墳と氏寺は大体同じ

所にあるのです。ところが天皇家はどうかといふと、天皇家には本貫がないのです。本貫がないといふのは第1代の神武天皇から始まっています。第15代の応神天皇以前の各天皇の実在性は確かではないと言われておりますが、たとえそうであるにしても、神武天皇以下、歴代天皇は一代一宮です。神武天皇は畝傍櫛原宮、緩靖天皇は葛城高丘宮というように、天皇ごとに宮が違うのです。宮が違うのは名前が違うだけではなく、宮の場所が違うからです。

地図を広げまして、第1代の神武天皇から歴代の天皇の宮を記していくと、各地に動いていくことがわかります。つまり、天皇家には本貫がないのです。天皇は一代ごとに、新しい宮を建て遷っている。その理由について本居宣長以来いろいろ説があるのですが、私はこう思っております。

司祭者である天皇の宮は、天皇の住居ではなくて、第一義的にいいうならば、神を祭る神聖な祭場であったと思います。司祭者であるところの天皇が亡くなれば、その宮は死の穢れを受ける。そうすると、次の天皇は新しい宮を建て、そこに遷ることになります。こうして歴代の天皇は、一天皇一宮の慣行を厳守するわけです。歴代遷宮の慣行にストップがかかるのは、41代の持統天皇の藤原宮の時代です。藤原宮には持統・文武・元明の3天皇が住むことになります。元明天皇は奈良に宮を移しました。奈良の都で7代つづき、次に京都に遷るわけです。とにかく持統天皇までは一天皇一宮です。遷宮は大変な事であったに違いないと思うのです。これは一般の豪族には見られないことです。豪族には本貫があったからです。

天皇の本質が司祭者であると考えれば、天皇の責任で外国の神、すなわち仏像を宮廷に迎えることは重大なことです。天皇が祀る神に直接関係するからです。これは天皇一存で決めることが出来ないといって、これを拒むことはできない。もし天皇が仏教を受容するならば、宮廷に仏像を迎えるを得なくなります。そうするとこれまで宮廷で祭られていた神との調整が問題になってくる。天皇が私人として神を祭っていたのではなくて、日本を統治する公人として祭っているのです。つまり公人として仏教を受容するか否かは、欽明天皇の一存では決まるものではあり得ない。欽明天

皇が仏教を受け容れなかった理由はここにあると思うのです。同時に天皇家に対して、従順にならざるを得ないところの、大連の物部尾輿の立場もあります。物部氏は天皇に同調して仏教を受け容れなかったのです。

欽明天皇が、仏教を受け容れなかったもう1つの理由があります。それは仏教は何の役に立つかという疑問であったと思います。

欽明天皇に仏教を伝えたのは百済です。百済の聖王が仏教を伝えたのです。ところが百済は、北は高句麗から、東は新羅から押され続けているのです。仏教をあれほど信仰しても、国を護り、国を救うことには何の役に立つかという疑問があったのではないかと思います。もし仏教を受容したなら、仏教の力によって、高句麗や新羅の進攻を抑えることができるとすれば、仏教の利益は、欽明天皇にもわかります。ところがあれ程熱心に仏教を受け容れている百済においてすら、この有様です。仏教は役に立たないという判断があったのではないかと思います。そこで欽明天皇は仏教を受け容れなかったというのが私の考えです。しかし蘇我氏は初めから仏教を受け容れるつもりでした。

## 7. 宮廷仏教から国家仏教へ

さて仏教が欽明天皇の時代に伝えます。それから約半世紀の間、大臣の蘇我氏と、大連の物部氏との間に葛藤がありました。結局は物部守屋が蘇我馬子によって打倒されます。つまり軍事的手段によって仏教受容の道が開かれるのです。

仏教は平和なものであるとすれば、話し合いによって仏教受容の問題を解決してもよかったです。が、物部尾輿の次は物部守屋が出てまいります。蘇我稻目は蘇我馬子が出てきます。つまり次の世代になって、反仏派の物部氏を軍事的に打倒することによって、日本における仏法興隆の道が開かれることになりました。何か考えさせられます。反対派を叩きつぶさないことには、仏教文化の花を咲かすことができなかったのです。

蘇我氏は奈良県の飛鳥に住んでいました。飛鳥は蘇我氏の本貫ではありません。蘇我氏の本貫は大阪府の石川という所でした。稻目の時代に飛鳥に移ってくるのです。ところが物部氏は河内の波

川、今の布施市が本貫でした。大和川を抑える枢要の地でした。とにかく河内の物部氏が大和飛鳥の蘇我氏を中心とするところの、軍事的な攻勢に結局敗れまして、仏法興隆の道が開かれるのですが、その直後に蘇我馬子は、百濟から伽藍造営の工人・技術者や僧侶を招きまして、日本最初の寺を建てます。飛鳥寺です。正式の寺の名は法興寺です。

当時のキャッチフレーズとして「仏法興隆」という言葉が使われています。仏法を興隆するということです。ただし「興隆仏法」というべきでしょう。とにかく「仏法興隆」の「法興」を取りまして、正式な名前として法興寺と呼ばれたと思います。「法隆」の文字をとったのが法隆寺です。つまり法興寺と法隆寺は「仏法興隆」という、当時の一種の合い言葉とをわかつち合っているわけです。

ある段階で飛鳥の法興寺を擁する蘇我氏は、斑鳩の法隆寺を擁する聖徳太子の一族を滅ぼすということになります。聖徳太子がなくなつて21年目に、馬子の孫に当ります蘇我入鹿が、聖徳太子の長子である山背大兄ら太子一族20余人を滅ぼしてしまいました。蘇我氏にとって、仏教は何であったのか、と考えさせられます。

推古天皇は日本で最初の女帝です。推古天皇は仏教に対してどうであったでしょうか。欽明天皇は仏教に対して傍観中立の立場をとったと申しました。欽明天皇の次は敏達天皇です。次の用明天皇は聖徳太子の父に当る方です。次が崇峻天皇です。それから推古天皇、舒明天皇と続きます。欽明天皇は傍観中立でした。次の敏達天皇は物部氏に荷担致しまして、蘇我氏が建てた塔を倒すというようなことをしています。中立というよりは排仏に傾いた天皇です。

用明天皇は仏教に帰依した人です。というのは、用明天皇が病気になりました、そして仏教の力で自分の病気を治したいと考え、豊國法師を宮廷に招いた。豊國法師は固有名詞ではなく、豊の国の医療集団ではないかと考えます。坊さんが医者を兼ねたような時代です。豊國法師が宮廷に招かれた途端に、蘇我氏と物部氏との対立が激化しました。その間に天皇が亡くなってしまう。用明天皇が亡くなった直後に、蘇我馬子は物部守屋を滅ぼしてしまうのです。用明天皇の仏教帰依は実現し

ないうちに、天皇はなくなりました。しかし用明天皇は、天皇として初めて仏教帰依を表明した天皇です。

次の崇峻天皇は仏教と関係がありません。即位をして5年目に、蘇我馬子によって殺されました。古代において身分の高い方は亡くなりましたら、殯と申しまして、陵墓に葬るまでの間、3月間とか、あるいは半年間、長きは2年間以上も遺体を安置して、身近の人がそれに仕えるのです。殯をせず、即日葬られた天皇は、崇峻天皇だけです。とにかく用明天皇の仏教帰依は、用明天皇の死と共に終りました。

次は推古天皇です。推古天皇こそ仏教に關係があるとお考えになるでしょう。仏教に帰依したとお思いになる方が多いと思います。私はこれに賛同できません。

用明天皇が亡くなつたとさくさに紛れて、蘇我馬子は物部守屋を滅ぼしました。そして仏法の興隆の道が開かれたのです。蘇我氏は飛鳥寺を建てるます。これにならいまして、蘇我氏側の豪族達が次々に寺を建てていくのです。先程申しましたように、飛鳥時代の寺の数は40近くあるのです。ところが推古天皇は寺を建てるとはしなかったのです。個人として、推古天皇が、仏教に帰依する意志があったかどうかはわかりませんが、結局、寺を建てるということはありませんでした。したがつて推古天皇は仏教に対して、一線を画していたというのが私の考え方です。何故なら、寺を建てるということは善根功德です。仏像を作るとか、お經を読むというのも善根功德です。寺を建てるることはさらに大きな善根功德です。伽藍を造ることは推古天皇の力では当然出来たのです。先進国である百濟、新羅、また中国の隋や唐では、国王や皇帝は寺を建てていました。推古天皇はそれを知っていたはずです。皇帝、国王が寺を建てていることも知っておれば、これが善根功德だということを知っていたのです。しかし推古天皇は寺を建てようとはせず、実際に寺を建てなかったのです。

天皇として、初めて寺を建てたのは誰かといいますと、それは舒明天皇でした。舒明天皇の時代になって仏教は天皇家に受容されたと思っております。またそれはそれなりに理由があるのです。

推古天皇の時代に遣隋使が派遣されました。隋

は中国の南北朝時代に終止符をうちまして、統一帝国を実現いたします。このとき遣隋使が派遣されます。遣隋使は、聖徳太子が派遣したか、あるいは蘇我馬子が派遣したか、聖徳太子と蘇我馬子が協同で送ったか、ということで問題があるのでですが、とにかく遣隋使が派遣されました。

遣隋使を派遣する時に、学問僧も同行したのです。学問僧がいつ日本に帰ってきたかというと、それは舒明天皇の時代でした。僧旻や惠隱などは20年、30年の長い間、留学していました。隋が倒れ、唐に移るという革命も見聞したのです。隋や唐においては皇帝が宮廷の内道場に仏像を迎える、また皇帝が先頭に立って寺を建てるという仏教界の実情を目撃してきました。学問僧は新羅に寄って帰ってくるのです。新羅の仏教界も同じことです。

そういう先進国の仏教事情を舒明天皇に建言、つまりアドバイスし、その結果、舒明天皇は公的ならびに私的に仏教に傾いていったと思っております。舒明天皇によって建てられたのは百済寺です。九層の塔をもつ寺でした。蘇我氏の法興寺（飛鳥寺）には五層の塔があったと考えられています。

舒明天皇の皇后は皇極（齊明）天皇です。その皇子が中大兄と大海人、つまり天智天皇と天武天皇です。中大兄も仏教に帰依した人です。飛鳥に川原寺があります。金堂の址には大理石の礎石が並んでおります。大理石の礎石のある寺は他にありません。川原寺の場所に、もと齊明天皇の川原宮がありました。齊明天皇が亡くなり、長子の中大兄は、母に当る皇極天皇の宮を寺にして、川原寺としたのです。

齊明天皇は九州で亡くなりました。百済が新羅に滅ぼされた時、百済復興のため、68歳という高齢にもかかわらず、九州に来て百済救援の指揮をしましたが、ついに福岡県の朝倉で亡くなりました。齊明天皇の追善のために、中大兄は九州に寺を建てました。觀世音寺です。大宰府の隣りにあります。大海人皇子、すなわち天武天皇は、壬申の乱の前夜に出家しております。僧侶になって吉野に逃げて行ったのです。これは政治的理由によるのですが、天武天皇の皇后の持統天皇は天智天皇の娘です。持統皇后が病気になった時、天武天皇は持統皇后の病気の快癒を祈って寺を建て

ました。薬師寺です。畠傍山の近くにあります。都が奈良に移り、薬師寺も奈良に移りました。西の京の薬師寺です。天武天皇も寺を建てました。大官大寺です。法興寺、すなわち飛鳥寺が伝統的に大きな力をもっていたのですが、これに優位するところの九層の塔を持つ大官大寺を建てたのです。この寺も奈良の都に移りました。大安寺です。

舒明・皇極・天智・天武は、舒明一家の天皇です。つまり舒明一家が仏教に帰依しました。その帰依は、私的な宫廷仏教の段階を越えまして、国家仏教の段階を迎えます。仏教によって国を守るという国家仏教の段階です。国家仏教の前は氏族仏教の段階でした。各豪族が仏教に帰依するという段階が氏族仏教ですが、国家と結びつく国家仏教の成立は、やはり天武天皇・持統天皇の時代、つまり白鳳時代を待たねばなりませんでした。天武天皇・持統天皇の頃から、日本の仏教は、これまでの氏族仏教から国家仏教にその体質を変えていったのです。

日本の律令体制は天武・持統の時代に成立するのです。だから日本の国家仏教の成立は律令体制の成立と時期を同じくしています。国家仏教は律令体制と不可分でした。これまででは氏族単位の仏教でした。その氏族仏教の上に、仏教の力によって、天皇が治める国土、人民を擁護してもらうという国家仏教が現われます。そして都には天皇の官寺が建てられる。大官大寺です。大官大寺を軸として、中央、地方に貴族、豪族の寺々が建ちます。飛鳥時代の寺は大和、河内とその周辺に40近い寺しかなかったのですが、白鳳時代には、関東地方から中部、中国、四国、九州のほぼ日本全土に、520の数の寺が七堂伽藍の威容をあらわしました。爆発的な寺の増加です。中央の大官大寺を始め、各寺々において、国家仏教の經典すなわち『金光明經』とか、『仁王經』の護國の經典が読まれるのであります。そういう仏教の変質がなされるのです。

（第4回講演会講演内容より）

## 略歴

大正6年（1917）、奈良県橿原市八木に生まれる。昭和16年（1941）、九州大学文学部国史学科卒業。九州大学教授、熊本大学教授を経て、現在、九州歴史資料館長。九州大学名誉教授。文学博士。専攻、日本仏教史